

## 土と基礎に関する 技術者のための英語

## 8. 座談会

## 出席者：

チャールズ ハイデングレン (Charles R. Heidengren)  
川崎製鉄㈱エンジニアリング事業部土木技術部マネージャー，専門は土質基礎工学およびプロジェクトマネジメント，滞日10年，アメリカ土木学会日本支部支部長，クーパーユニオン大学土木工学科卒，コロンビア大大学院にて土質力学専攻，1930年生まれ。

デニス ノーマイル (Dennis Normile)

土木工学およびビジネスを専門とするフリーランス・ライター，1986年までは米国において構造設計技術者かつスベック・ライター，滞日3年，ピラノバ大学土木工学科卒，1951年生まれ。

フィリップ リード (Philip E. Reed, Jr.)

基礎地盤コンサルタンツ㈱本社企画室勤務，専門は土質基礎工学，滞日4年，以前は海軍航空施設事務部部长として米軍三沢基地に駐留，レンスレー工科大学卒，アリゾナ大大学院にて土質工学専攻，1959年生まれ。

吉見吉昭 (よしみ よしあき)

清水建設㈱顧問，東京工業大学名誉教授

司会：赤木俊允 (あかぎ としのぶ)

東洋大学工学部土木工学科教授

司会：「土と基礎に関する 技術者のための 英語」と題する講座を締めくくるものとして，日本の土質・基礎工学の技術者と共に仕事をする3人のアメリカ人土木技術者をお招きし，技術英語に詳しい吉見先生を交えて，座談会を開催することに致しました。まず最初に，3人の方から日本人技術者の使う英語についてどんな感想をお持ちか，お聞きしたいと思います。

## 日本人技術者の英語

ハイデングレン：日本人の土木技術者が書いた英語を手直しすることを随分やりましたが，日本人はテクニカルなものでも一般に華麗で叙述的な言い方を好む傾向があります。技術的なものでは調査結果やデータに基づいて，主題をはっきり定義し結論を限定して簡潔に書くことが大切です。

ノーマイル：専門用語の問題よりは，

その回りの言葉がもっと大きな問題となるようです。普通日本人の技術者は正しい術語はよく知っているわけだし，知らなければ辞書や専門書で容易にチェックできるわけですが，術語をつないで正しい英文にすることはなかなか簡単には行かないものです。その辺が日本人技術者の弱点であると思われていますが，これを改善するにはいろいろな状況下の英語を長期にわたって使い込む以外に道はありません。

リード：日本人は一般に文法にこだわり過ぎではありませんか。全体を文法的に完ぺきなものにしようとし過ぎるように思います。

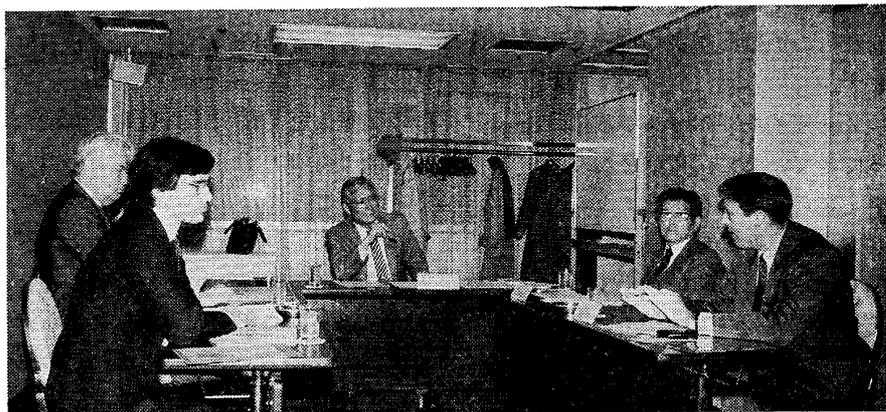
司会：日本人技術者がよくやる間違いについてはいかがでしょうか。

ハイデングレン：LとRの区別は苦手そうですね。By the wayとかAs a matter of factとかは会話ではよく使われる表現ですが，テクニカルな文章では絶対に使われないものですから，論文やレポートに使用してはなりません。

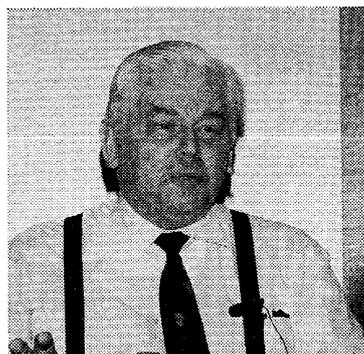
ノーマイル：車20台というときに，かなり英語のできる人でも20 carsといわずに20 units of carsといったりします。おそらく日本語の「台」にこだわるからでしょう。

ハイデングレン：杭100本は100 pilesといえよといところを，わざわざ100 pieces of pilesといったりするのは間違いです。もっともこれらは理解を妨げるほど重要な誤りではありませんが。

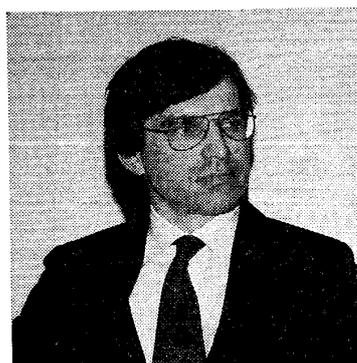
リード：話す言葉では特に，間違いはそんなに気にならないものです。私はこの3，4年日本語の勉強をしているのでよく分かりますが，外国語を話す時の緊張感や恐怖心が一番大きな問題だろうと思っています。10年も15年も英語をやっているのに，まだ恐怖心に捕らわれている日本人が



## 講座



Mr. Charles R. Heidengren



Mr. Dennis Normile

多いようですね。

### 良い英文を書くには

吉見：良い英文が書けるようになるためには良い文章をたくさん読むことが重要だと思いますが、土質工学の分野で特に優れた文体を持つ書き手は誰だと思いますか。

ハイデングレン：R.B. Peck, H.B. Seed, T.W. Lambe, R.V. Whitman などがまずあげられるでしょう。

リード：University of British Columbia の R.G. Campanella と P.K. Robertson, University of California, Berkeley の R.E. Goodman, それに Norwegian Geotechnical Institute の S. Lacasse と T. Lunne などの文章も平明で読みやすいものです。

吉見：“Subsurface Exploration and Sampling of Soils for Civil Engineering Purposes” を著した M.J. Hvorslev は英語を母国語としない外国人ですが、彼の文章のスタイルをどう思いますか。

ハイデングレン：ずいぶん昔の話になりますが、彼の英語はややフォーマルながら非常に分かりやすいものでした。特に彼の本は興味深く実地的で、実例も豊富であり、私の若い時分には一種のバイブルでした。

吉見：Hvorslev の本は1940年代に書かれ、Terzaghi-Peck や Taylor の教科書もその時代に出版されたわけですが、技術英語やスタイルは過去40年間に少しは変わったと思いますか。

ハイデングレン：手の込んだ精巧なものからより短く簡潔なスタイルへと変わってきました。また、テーマも包括的なものからより狭く定義されるようになってきたと思います。

ノーマイル：30～40年前に比べると英語の文章は短くなってきています。文章を短くし、一つの文には一つのアイデアだけを盛り込むようにすれば、早く読めることになります。我々は皆、多くの情報に取り囲まれていますから、早く読めれば大助かりです。近頃の新聞や雑誌の編集者は、書き手に一つの文は25語以下に抑えるように依頼するようです。

司会：Terzaghi の英語はどうでしたか。

ハイデングレン：私は直接には知らないのですが、友人の話によれば、Terzaghi の英語には彼の母国語であるオーストリア式ドイツ語が会話に入ってくるので、二度三度聞き直さなければならないことも多かったとのことでした。彼が書いたものについてはどの程度他人の手が入っているのかわかりません。Peck を始め多くの人がレビューしたでしょうし、米国土木学会(ASCE)や英国土木学会(ICE)では、論文を読みやすくするために数人のエディターやレビューアーが相当に手を加えますからね。

リード：学会の論文集にでる論文は1年も1年半もかけて十分に練られているのが普通ですが、シンポジウムの論文は締切り2週間前に大急ぎで仕上げられたものもありますからね。

ハイデングレン：ASCE の月刊誌 Civil Engineering は随分エディターが手を入れますね。私の書いたものもより受けるようにするためか、硬い技術的な点を少し削られました。

ノーマイル：私のレポートも書き出しの部分を少し変更されました。Civil Engineering は論文集よりもっと多くの読者に届けられるものだから、テクニカルになり過ぎないように留意しているようです。

司会：ハイデングレンさんは川崎製鉄の富永真生さんと連名で、海洋工事における鋼管杭に関するレポート“Steel Pipe Foundations for Deep Water (March, 1988)”を、ノーマイルさんは単独で、昨春開通した本州四国連絡橋を紹介する報文“Japan Spans the Inland (April, 1988)”を Civil Engineering に出されましたね。

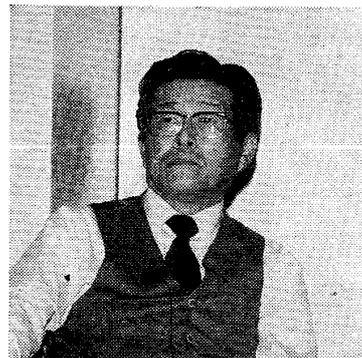
### 英文レポート

吉見：無駄のない英文の書き方、不必要な部分を取り去って英文を短くする方法についてコメントして下さい。

ハイデングレン：土質工学のレポートを含むテクニカル・ライティングでは、ここに問題がある、調査のために我々のやったことはこれだ、ここに調査結果がある、我々の調査結果から得たパラメーターはこれだ、我々の問題解決のためにどうやってそのパラメーターを用いたか、そしてここに結論がある、という具合に数ステップに分けてでき



Mr. Philip E. Reed, Jr.



吉見吉昭氏

るだけ簡潔にレポートする。余り過去のことにこだわらず、現状から出発する。書くときは自由に気楽に必要なことを全部書く。その後でレビューし、重複したり、繰り返したりしているところを取り除く。こうして無駄のない文章を作れば、新たに書き加えるよりは簡単です。

リード：私は海軍にいましたので弾丸方式 (Bullet format) と呼ばれる書き方を教えられました。これは弾丸を並べたような形でテックス文型の短い簡潔な文章を書く方法ですが、半ページか1ページ程度のメモを作るのに極めて有効です。自分のいたいことをコンパクトに表現する方法として、技術的なものを書くためにも役に立つのではないかと考えています。

ハイデングレン：手紙、メモにせよ、技術的な報告書、論文にせよ、書かれたものはすべてパラグラフに分解されます。各パラグラフは書き出しの文、本文、結論的な文から成り立っています。ちょっと単純化しすぎるかも知れませんが、各パラグラフがそのように系統だって書かれれば、後はそれらのパラグラフを一まとめにすれば良い文章ができあがるというものです。各文をできるだけ簡単に書くということも重要ですがね。

また誰に対して誰のために書くのかということが、どんな風を書くべきかということを決めるわけです。例えば、お偉方のために用意されるエグゼクティブ・サマリー (executive summary) と呼ばれる要約文はできるだけ分かりやすく簡潔に、専門的な内容を必ずしも専門家ではない人に伝達するためのものですが、なかなか簡単に書けるものではありません。読み手のことをよく考えて書き、効果的にテーマを売り込むことが大切です。

吉見：大変難しい質問になりますが、自分の主張したいことに重点を置いた力強い文章を書くテクニックはありませんか。

ノーマイル：そのための決まった方式やパターンがあるとは思えませんね。

ハイデングレン：論文では最初に掲げられるアブストラクトに短い文で主要な結論を述べること、広告文なんかでは目を引くキャッチフレーズが重要だ、ということでしょうね。

司会：コンサルタントのレポートとアカデミックな論文とは異なるでしょう。

ハイデングレン：コンサルタントのレポートは、契約によって義務づけられた仕事の特定の範囲をカバーするものです。これに対し、アカデミックな論文は研究結果に基づきより大きな範囲をカバーするものです。私が昔勤めていたコンサルタンツ会社のボスは、「支払って貰う分以上には与えるな」、つまり、余計なことは書くな、とよくいていたものです。

ノーマイル：コンサルタントのレポートは専門家でない人達にも理解できるものでなくてはなりません、アカデミックな論文は専門家にのみ分かればよいわけです。

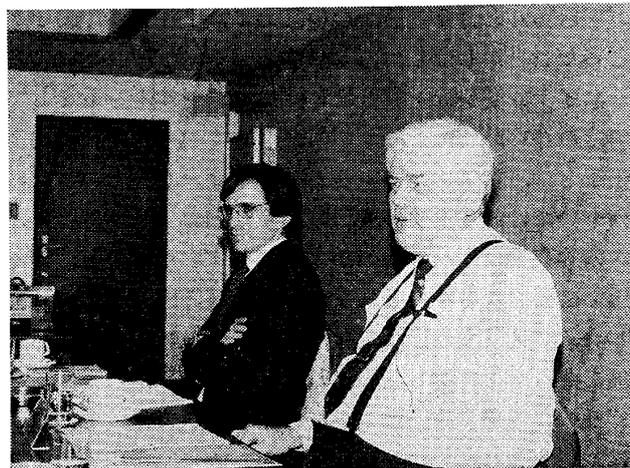
リード：コンサルタントのレポートはパラメーターなどが異なるだけで、その大部分はほぼ同じ内容となります。アカデミックなものは異なるアイデアに基づく異なる内容を持つものということができます。

### コミュニケーションの相違

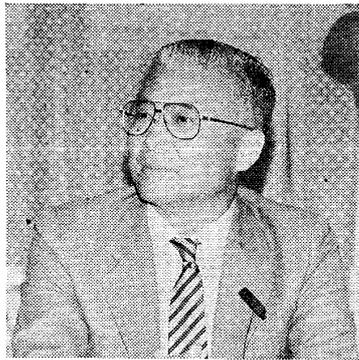
司会：考え方の違い、コミュニケーションの習慣の相違、ビジネスのやり方の相違、について何か御意見はありませんか。

ノーマイル：これは難しい問題ですが、個人的なベースでは、人々がいうほどにその差は大きくないように思います。

リード：この問題はいつも話題に上がるのですが、私も



## 講座



赤木俊允氏

余り驚くような体験はしておりません。私はある程度日本のことを勉強してきましたので、カルチュラル・ショックも余りありませんでした。軍隊生活で三沢基地にいた時には、流暢に英語の喋れる日本人はそう多くはいなかったのですが、日本人との距離を余り感じませんでした。しかし、現在の東京での会社勤めでは、日本人社員が外国人の扱いに馴れていないせいでしょうか、平均的には若干の距離を感じております。それでも外国人としての違和感は余りありませんね。

ハイデングレン：ビジネスのやり方については、基本的な文化の相違や深く根ざしたものの考え方がかわりを持つことは否定できません。日本式の「意見の一致」については未だに戸惑いを感じています。例えば、アメリカ側と日本側とが英語で会議をしている時に、アメリカ側が何か問題を提起すると日本側はストップをかけ、日本人同士で日本語の会話を10分も15分も続ける。時には席を外す、本社へ電話をかける、ファックスを送る、挙句の果てに返事は明日まで待ってくれという、ということで会議を続行することができなくなってしまいます。国際的な交渉では、日本側はもっと直接的になること、チームのリーダーにもう少し責任と権限とを与え、イエス、ノーがいえるようにすることが望ましいと思います。

司会：日本においても、国内と海外の仕事のやり方に大きな断絶があることが問題になっています。例えば日本側に、現場における合意事項を文書で確認する、といったことをきちんと行う習慣がないために、トラブルや紛争が起こったことがしばしばあります。

ハイデングレン：私は日本側のコンサルタントとして、何度か今いわれたとおりの体験をしております。契約上の相手とは、和気あいあいと握手してオーケーというだけでは十分ではありません。法律意識の強い英米では特に、口頭の約束事はすべて書いたものにしておかないと、後刻法廷で必要となるかもしれませんからね。建設省あたりでは昨今、アメリカの建設業者が日本に入ってきて、たちまち誰もかれもを告訴し始めるのではないかと、おっかなびっくりのようですね。たしかに日本の現状では、そんな事態に対応しきれないかもしれません。国際的に仕事をするた

めには、スケジューリング、支払い、クレーム、現地でのビジネスのやり方などについて、長い経験を持つ英米のプラクティスを研究する必要があります。

リード：私のいた三沢基地は田舎ですから、あの辺りの請負業者は国際的な慣行に馴れていません。基地で仕事をするためにはアメリカのシステムに従わねばなりません、大変多くのペーパーワークを必要とし、すべてのことは書いたものに基づいて行われます。請負業者たちは平生口約束だけで仕事をやっていますから、契約だの書類だのは苦手なようです。

## 時制の問題

司会：この辺りで読者から寄せられた英語に関する質問に移りたいと思います。吉見先生からお願い致します。

吉見：読者からの質問の一つに、時制 (tense) の問題があります。例題として、ASCEの土質部門の論文集からとったものを図-1に掲げますが、最初の文が現在完了形、次の2文が過去形で最後の文が現在形なのはなぜか、を議論していただきたいと思います。

ハイデングレン：これが書かれる以前にすべての研究が終わっているのであれば、すべて過去形を使うのがよいと思います。

リード：このような抜粋ではなく全体の文脈を見ないと確定的なことはいいいにくいですね。現在形ならすべて現在形、過去形ならすべて過去形と、統一した方がよいと思いますが。

ノーマイル：もし最近の研究結果に言及しているのなら現在形、20年から100年ぐらい前の古い研究結果を指しているのなら過去形が妥当だと思います。新しいとか古いとかいっても、その境界は必ずしも定かではありませんが。この場合最後の文で、もし Denisov and Reltov および Miura and Yamanouchi (D-R & M-Y) の研究結果につ

Laboratory studies have indicated time-dependent strength and stiffness increases in clean sands subjected to sustained pressure. Lee presented test results and summarized data from several sources to show that adhesion bonds can form in sands confined under high pressures, i. e., greater than 6 MPa at room temperature. Mechanisms for bond formation suggested by Lee included capillary forces at particle contacts, cold welding from high pressures at particle asperity contacts, and silica solution from sand grains and redeposition at asperity contacts. Denisov and Reltov and Miura and Yamanouchi present data to illustrate the important role of water in the formation of adhesion bonds and hypothesize that silica solution and redeposition is the controlling mechanism.

(J.K. Mitchell and Z.V. Solymar, Journal of Geotechnical Engineering, ASCE, Vol. 110, No. 11, 1984, p.1560)

図-1 文例

いて議論しているのなら、現在形を使うのが適当でしょう。

司会：最後の文を過去形にするとすれば、時制の一致の原則により、文章の中の is は was にすべきですか。

ノーマイル：それは少々問題で、古い文法書によれば was ということになるのですが、現在の用法は変わってきています。つまり、条件が変化していなければそのまま現在形 is が使われるのが普通です。例えば古い文法では、“Yesterday Dr. Yoshimi said that Philip Reed was a man.” と過去形に統一するわけですが、Philip Reed は現在でも a man なのだから、やはり was はおかしい、is にするのが普通だということになります。

吉見：古い文法書でも不変の事実については、“Galileo said that the earth is round.” となっていますが、これを少し拡張して、現在は書き手が真実だと思っている限り現在形で表現してよいということなのでしょうか。

ノーマイル：もし条件が変化していなければそういうことになります。しかし、図-1の最後の文についても、もし後程の研究結果が、silica solution and redeposition は the controlling mechanism でないことをはっきり示したとすれば、当然 was にすべきでしょう。

### 単複の問題

司会：日本人にとっては単複はいつも大問題なのですが、silica solution and redeposition は二つの異なることを指しているのだから is ではなくて are ではないでしょうか。

ハイデングレン：これら二つが別個のものなら当然複数扱いです。一つの現象なら単数扱いになるわけです。誤解を避けるためにはこの場合、主語にアンダーラインをするか、句読点を付けるのがよいかもしれません。

司会：ネイティブ・スピーカーは困らないでしょうが、我々日本人は常に単複の問題で悩まされています。私もあることを単数で表現すべきか、複数で表現すべきかと、常に迷います。

リード：実はネイティブでも困ることがあるんですよ。特に高校を出たばかりで軍隊に入ってくる若い連中の中には、単複の区別もつかなければ、まともな手紙一本書けないのがいるんですから。

ノーマイル：ネイティブでも一考を要することはしばしばあります。単数にするか、複数にするか、どの表現がぴったり聞こえるか(Which one sounds right?), と考えるわけです。

ハイデングレン：三人いれば三人の考え方、感じ方、好みが皆違いますから、それぞれ表現、文体、文脈も異なってきます。単複についても同じことがいえるでしょう。

ノーマイル：とにかく5人の専門家がこれだけ議論しても、余りはっきりした結論が出てこないぐらいですからね。(笑)

### this と that の問題

吉見：次の質問は、this と that の時間的順序についての用法なのですが、that は以前に言及したこと、this はその後のことを指すと思ってよいでしょうか。

ノーマイル：例えば、図-1の最後の文に出てくる D-R & M-Y に言及した後、That research suggests something. というように that を使います。一方、これからいわんとすることに言及して This research reaches a different conclusion. という具合に this を用います。this は現在の時点および観点に近い、しかし、that はそれよりも時点と観点が離れている、ということになります。Your research と D-R & Y-M's research との間に相違点があれば後者に対し that research といって、分離を意味し微妙な違いを表現することになります。

リード：同意を表すときには、This research suggests something you agree with. という具合に this を用い、不同意を表すときには、that research と言及することになります。

ハイデングレン：特に論文報告集のようなものでは、何が新機軸になる点なのか、何が独創的な点なのか、現状に対して新たに寄与する点は何であるのか、が最も重要なことなのであって、細かい文法の問題に余りこだわることはないと思います。

吉見：でも少なくとも、著者のやったことを読者に納得させる程度には、きちんとした英語になっていないと困りますからね。

ハイデングレン：論文の種類にもよるでしょう。実際のケースヒストリーとか、進行中の建設プロジェクトの報告とかでは、良い英語で書くことは重要です。しかし、近頃の土質基礎部門の論文の中には75%が数式で埋まっているような論文があり、当然そんな論文では英語の問題は比重が少ないと思いますね。

リード：そういう論文は、何が重視されているかを明確に物語っていると思います。数式に間違いがなければ、レビューアーは文句をいわないわけです。つまり、内容の勝



## 講座

負ということでしょうね。

## 国際語としての英語

司会：英語は国際語といわれてすでに久しく、ネイティブ・スピーカーの話す英語とは相当に異なる英語が、国際的には広く使われています。国際語としての英語、あるいは英語の国際版についてどんなふうに考えていますか。

ハイデンングレン：国際語としての英語といえるようなものがあるかどうかは疑問だと思います。例えば、マレーシア、シンガポール、香港などは強い英国の影響を受けていますし、オーストラリアはもともと英国から派生したものです。アメリカ人の多いところでは米語の影響が見られますが、人によっては英米両方の影響を受けている場合も見受けられます。

ノーマイル：国から国へのパリエーションはありますが、技術的な術語は英か米かのどちらかだと思います。英米で少し違いますからね。

ハイデンングレン：例えば、杭打ち時に杭の頭にのせるクッションは米語で cushion ですが、英語では dolly といいます。また、港は米語では harbor ですが、英語では harbour と綴ります。このように米は米、英は英で、お互いに変えようとはしませんから、日本人にとっては混乱の原因になると思います。教科書、仕様書、図面には異なる表現や術語が見られるわけで、アメリカの術語辞典を引いても、国際的に使われるすべての単語が出ているわけではありませんから、我々でも困ることがあります。

リード：東南アジアの諸国では、国によって異なる英語を話しているように思われます。彼ら同士ではよく分かり合っているのでしょうかけれど、私には半分くらいしか分からないことがしばしばあります。そういった意味では、国際的な英語と呼ぶべきものがあるといつてもよいのかも知れません。書かれた英語については、日本人はシンガポールやマレーシアの人々と同様、やや英国的である場合が多いように思います。我々アメリカ人が一人称的な表現をするのに対して、三人称的な表現を好むようですね。例えば、手紙の終りに、アメリカ人は、If you have any further questions, please do not hesitate to contact me. という具合に一人称として直接に me というのですが、三人称的に to contact the undersigned ということが多いようです。手紙の始まりについても、日本では Dear Sir という間接的な言い方が好まれるようですね。

吉見：それについての話になりますが、手紙の始まりに使われる Dear Sir と Gentlemen とについて、その手紙を受け取る相手が女性だったり、女性を含むことが考えられる場合にはどうすればよいのでしょうか。

リード：男性を表す単語で女性をも含めようとする表現や性の差別があからさまになるような表現は、近年のアメリカ合衆国ではなるべく避けようとする傾向があるわけで

す。このような煩雑さを避けるため、最近は何の書き出しもなくいきなり本文が始まる手紙も増えているように思います。合衆国以外を対象とするのであれば、Gentlemen でよいでしょうが。

司会：英語の国際版でやるなら、さしずめ Ladies and Gentlemen というところですかね。(笑)

ノーマイル：手紙ではやはり Ladies and Gentlemen とするのは変ですね。私は Gentlemen とすることにもややちゅうちょ致します。10年ぐらい前まではよく Dear Sir/Madame としたものなのですが、今はこの表現もあまり使われなくなったようです。正直いって何と書けばよいのか困りますね。

ハイデンングレン：私は会社宛に出す場合も Dear Sir や Gentlemen と書くよりも、できるだけ特定の名前を探してその人宛に手紙を出すようにしています。そうしないと手紙がどこへ行ってしまいか分かりませんからね。

## 英語の能力をアップするには

司会：英語でコミュニケーションする能力を改善するにはどうすべきなのか、アドバイスをお願いしたいと思います。

ハイデンングレン：日本の教育システムでは読み書きに重点が置かれ過ぎています。言葉は本来、繰り返し聞くことにより意味を知り話せるようになるものです。高校ないしはそれ以後に第二の言語を学ぶときには、耳からではなく目に頼ろうとするようになります。読み書きよりも、もっと聞くこと話すことに努力を集中させることが必要です。私は日本人に英語を教えるときには、できるだけ聞く話すのオーラルな方法を用いるようにしています。

リード：話すとき、書くときに、あまり文法や発音について意識過剰にならないことです。私の日本語も間違いだらけですが、余り気にしないことにしています。文法や句の用法については、本を読むことにより暗記しようとしてもすぐ忘れますが、実際に使ってみると容易に憶えられるものです。実際、練習、練習しかありませんね。

ノーマイル：私も英語を教えたり、日本語を勉強したりしていますが、上達するには練習あるのみだと思いますね。話すことが第一の目的なら、誤りを犯すことを恐れるべきではありません。書くことが目的ならたくさん読むこと、そして書いたものを直して貰い十分に検討することです。同じ間違いを繰り返さないためには、十分なレビューが肝要です。

ハイデンングレン：実際多くの場合、日本人技術者たちは、私が直してあげた英文を十分に検討している暇がないようなのは大変残念なことです。仕事の場合は、私が直した原稿はそのままタイプストに渡され、タイプされたものは校正のため直接私のところへ帰ってくるくらいです。良い英文が書けるようになるためには、なぜそう直されたのかを十分にチェックし、直した人と納得できるまで議論するこ

とが大切です。それにしても、いったん日本語で書いたものを翻訳するのは、非能率的だし手間がかかりますね。

吉見：手間がかかるばかりでなく、日本語と英語とでは考え方が違いますから、直接英語で書くことが非常に重要だと思います。いちいち翻訳していたのでは説得力のある良い英文にはなりません。

ハイデングレン：日本人が英語で発表するときはまず最初に、“I must apologize that my English is not very good.” などということが多いのですが、これは是非止めて貰いたいと思います。発表するべき重要なアイデアを持っているのですから、英語がどうのということよりも何を話すかが第一の問題です。英語の世界では謙譲の美德は通用しません。

リード：我々アメリカ人がその英語についてどう考えるかよりも、英語のレベルについては、日本人同士の競争の方が厳しいようです。米国ではいろいろな国から来た多くの移民がお国なまりの強い英語を話していますから、様々なアクセントや変わった表現に我々は馴れています。いわば外国人の英語をいつも聞いているわけです。日本人は小さな事を非常に気にするようですが、我々は余りにしませんから、もっと自由に話せばよいと思います。

司会：技術英語は多くの読者が深い関心をもっているテーマですから、本日の座談会も参考にさせていただければ幸いです。本日は長時間にわたり、有益なお話をありがとうございました。

本稿は、1989年3月1日ホテル聚楽において、英語で行われた座談会の録音テープを編集・翻訳したものである。

(文責：赤木俊允)

## おわりに

本号の座談会をもちまして、講座「土と基礎に関する技

表—8.1 講座「土と基礎に関する技術者のための英語」掲載一覧表

章	表 題	執筆 者	掲 載 号	ページ
1	講座を始めるに当たって	赤木 俊允	1988年 昭和63年12月号	87
2	土と基礎に関する技術者のための英語へのプレリュード	赤木 俊允	同上	88~ 95
3	コンサルタンツから見た技術英語	足立格一郎	1989年 平成元年1月号	99~103
4	コントラクターから見た技術英語の実際Ⅰ —入札から契約まで—	黒木 一實 佐藤 知二	2月号	103~111
5	コントラクターから見た技術英語の実際Ⅱ —技術英語はコミュニケーション—	海藤 勝	4月号	73~ 80
6	コントラクターから見た技術英語の実際Ⅲ —英語研修について—	加藤 逸郎	5月号	89~ 96
7	土と基礎に関する英語論文の書き方	吉見 吉昭	6月号	95~100
8	座談会	赤木 俊允	7月号	95~101

術者のための英語」を終了いたします。

この講座を始めるときの趣旨は「技術者が英語を読み書き（そして、聞いたり話したり）する上での基本的な留意点を示すとともに、多くの技術者たちが抱いていると思われる疑問、悩みに応える」ということでしたが、いかがでしたでしょうか。

「技術者のための」と題しましたが、やはり基本が大事だということでしょうか。会員の皆様には、上手な英文を繰返し練習するよう頑張ってください。そのために本講座がお役に立てば望外の幸いです。

“学問に王道なし”

本講座企画担当委員：加藤 誠，八谷好高，吉本祐二，  
前委員 北詰昌樹